藍野学院紀要, 第 20 巻, 2006, pp. 65 - 77

〔Case Report〕

A case of the Oedipus complex invading into adulthood

—— Mr. R's murderous ambition, confrontation with his father and achievement of the normal father's role through psychotherapy with Dr. J ——

Kenjo Mizohata*, Eiji Tanigawa*, Hidenobu Takeda*, Taishi Matsuo*, Syuichi Okuno*, Kengo Hirase*, Yukitaka Masuda*, Manabu Fukui* and Satoshi Kimura*

*Department of Nursing, Aino Gakuin College

Abstract

Mr. R (hereinafter called R) was abandoned by his "father" due to his parents' divorce when he was 3 years old. This is a story of R's overcoming of his Oedipus complex invading into adulthood through confrontation with his repressive father, to whom R asserted all he had kept in his heart for 19 years.

At the age of 5, R lost his own relaxing place among his "stepfather", stepbrother and half-brothers. It was in the middle of this hardship that R - then a 7 year-old boy - became a victim of a traffic accident. R was rescued by a policeman, whom he regarded as an "ideal father" - gentle and manly.

R got married at the age of 24 and his wife is expecting a boy baby in this December. But R was seriously troubled with the fact that the baby has a cleft lip. R, even thinking of abortion, was reluctant to disclose this disorder to his "father-in-law".

R was in a very stressful situation - in addition to being a nurse and student, he was obliged to write theses. Burdened with these obligations and unable to decide what to do with his first baby, R got angry and even wished to kill his repressive father, who had abandoned him.

But the "thesis supervisor" was Dr. J, psychoanalyst, so R asked Dr. J to treat him. After only 9 sessions of Dr. J's psychotherapy R got basic trust in Dr. J and became able to make decisions, which was a rather quick recovery.

Key words : Oedipus complex, abandonment anxiety, patricide, psychotherapy, confrontation

〔症例報告〕

成人期にまで遺されたエディプス・コンプレックス

――Mr. R と Dr. J の精神療法：父親殺しの克服と父親役割の明確化――

溝畑剣城*，谷川英二*，竹田秀信*
松尾耐志*，奥野修一*，平瀬健吾*
増田幸隆*，福井　学*，木村　智*

【要　旨】 これは，3歳の Mr. R が両親の離婚で「父親」に見捨てられ，19年後，自ら求めて再会した抑圧的な父親に思いの丈を突きつけた，直面化と長引いたエディプス・コンプレックスの自覚，克服の物語である。5歳以後，母は再婚し「義父」と彼の連れ子の義兄，母が産んだ異父弟との生活で，R は居場所を失った。7歳時，交通事故はそんな状況で起こった。現場に急行した警官に「理想の父」を見て R は救われた。そして24歳で結婚，26歳の12月長男誕生の予定である。しかし口唇裂の長男を堕胎するか否かで R は苦悩する。「妻の父」への報告も躊躇した。通常業務に，通信大学履修，論文作成，三種の仕事と第一子堕胎の決断を迫る，苦悶の極みに，父親を殺したいと思うまでに R はなった。だが「論文指導教授」が精神分析医 Dr. J で，R は J に精神療法を希求した。僅か9回，4ヶ月の面接での回復は，基本的信頼感がほぼ達成されたことを暗示している。

キーワード：エディプス・コンプレックス，見捨てられ不安，父親殺し，精神療法，直面化

Ⅰ．はじめに

これは，Mr. R（以下 R と略す）が20年という歳月を経て父親と再会し，その後，父への怒りや葛藤，父親殺しの感情を克服した物語である。精神分析医 Dr. J との運命的な出会いから，個別面接を受療することで R 自身が生きる原動力までをも得た事例である。

本例を報告する目的は，「父に見捨てられた」という切れた関係でのエディプス・コンプレックスの有様，内的対象関係を紹介し，短期で成功した本治療をフロイトの古典症例と比較検討することにある。また，これは治療者ではなく，受療者自身の言葉で書かれた治療の稀有な報告と思われる。

Ⅱ．Mr. R の生育歴

- 0歳（X－26年）Y月Z日午前5時H県O市で出生2,500 g。胎盤癒着のため帝王切開。翌日，父親の尊敬する浄土真宗僧侶の名をそのまま取り R と父が命名，届け出。R は，小学校入学の頃，母からこれを聞き，20歳時，戸籍謄本で確かめる。
- 3歳（X－23年）1年前頃より父母は不仲となり離婚。R は母に引き取られる。
- 5歳（X－21年）母は再婚し義父と養子縁組され R は姓が変わる。義父も再婚で連れ子あり。R は義父

* 藍野学院短期大学看護学科

を，頑固にも父親として認めず「おじちゃん」と呼んでいた。義父はRに対して無関心であった。母はRに「お父さんと呼びなさい」と強制した。H県K市に引っ越し，義父，義兄，母，R，4人での生活が始まる。

- 7歳（X−19年）母，義父の間に第一子誕生。RはK市内の小学校に入学する。弟の誕生後は，母が弟の面倒に忙殺され，Rは「いい子で，嫌われないようにしないといけない」という疎外意識が強くなりR自身の居場所を見失う。小学1年生時（X−19年）郵便車と接触し交通事故に遭う。その際，真っ先に駆けつけてRを救ったのはK西警察署地域課の警察官T巡査部長だった。階級は小学校の図書館で調べて解った。熱血漢で優しく理想の父親像だった。「坊主，大丈夫だからな。男だったら泣くな，強くなれ」と軽く頭を撫でてくれた。親元に連絡が取れず救急車で病院まで同乗してくれた。僅か1時間程度の関わりだったであろうか。警察官に憧れ始める。
- 8歳（X−18年）義父，母の間に第2子男児誕生。
- 11歳（X−15年）小学校6年時に社宅の賃料値上げを機にH県O市に引っ越す。小学校で3回目の転校である。
- 12歳（X−14年）国立HK大学附属中学に合格する。通学の関係上，母方の実家があるH県T町に引っ越す。
- 15歳（X−11年）O県の私立高校に進学し，独り暮らしを余儀なくされる。
- 18歳（X−8年）高校卒業。小学校の時の交通事故で警察官の姿に強い興味を持つ。幼時から夢見ていたO県警察官採用試験を受けるが二次選考にて不合格。母親が，医療職の義父に気を遣ってか，医療系専修学校の受験を薦め，気が進まなかったが受験し合格，入学する。入学後は，アルバイトをしながら生活費を得る。
- 20歳（X−6年）卒業。「これから先のことを考えると，進学して更に上の資格を取得する必要がある」と教務や母親に強く言われて進学。B医療専門学校に合格。
- 22歳（X−4年）B医療専門学校を卒業するが，国家試験不合格。予備校へ通い翌年の国家試験に備える。実父と再会する機会が出来てF市にて再会する。（後述）
- 23歳（X−3年）国家試験に合格して，奨学金返還のため，B病院に勤務する。
- 24歳（X−2年）現在の妻Lと交際開始，結婚する。家族用賃貸住宅に引っ越す。
- 26歳（X年12月）RとLの間に第一児（男児）出生予定。O県I市に自宅購入。

Ⅲ．父との現在に至るまでの関係

父は，母とはC大学の同期生で学部は違ったがゼミで知り合い交際開始。大学4年時にRの妊娠が分かる。しかし父は大学院進学が決まっており，文化人類学者への道に進むため，卒業後Rと母を見捨てて，独りT市へと旅立った。卒業後は，父方の実家が寺であるため，約2年間僧侶の修行，大学院との両立で収入は皆無だった。Rの養育費と生活費は，父方の両親からの仕送りであった。しかもRと母の許へは年に数回帰って来るだけで，母自身がそのような生活を不満に思い，Rが3歳時に父母は離婚する。幼かったRは，高速バス乗り場で母に抱きかかえられ，バス発車直前に一度父に抱かれて，父親がバスで去っていったのを覚えている。東の方角だったような気がする。父の顔は全く記憶にない。

その後17（19の記憶錯誤）年間は全く音信不通であった。父親のことを知りたいと思い，母に「一目，会いたい」という意思を告げたとほぼ同じ時期に父親から連絡があった。丁度，アメリカ同時多発テロ事件の（X−4）年で，Rは20歳（実際は22の記憶錯誤で，20歳は父と再会できたら一人前に成れると思っていたようだ）であった。父親は母と離婚後，アメリカで一流S大学の教官に成っていた。米国生活で，国籍が日本だと滞在期間は制約され，国籍変更には複数血縁者の署名が必要だった。父は興信所でRの所在を調べ，Rにも署名依頼の電話連絡をしてきた。これを機にF市で会う約束をする。

6年前（再度，4の記憶錯誤で父との再会の情緒的影響は大きいことが窺える）のP月Q日にF市にて17（19）年振りにRは父と再会する。H駅で，人ごみを避け，新幹線口で15時に待ち合わせした。同時刻に到着した。2人とも会いたかったのだ。Rの視界に中年男の姿が見えた瞬間，父と分かった。口には葉巻を銜えて，牛乳瓶の底のメガネに白髪交じりの坊主頭だった。顔の輪郭と眼の大きさ，鼻の形はRそのままだった。視線が合った瞬間，とても不思議な感覚と幸せが交錯したような気分であった。その後，F市内で1泊を共にして約20年間の出来事を細かく約9時間，語り明かした。酒を酌み交わしながらお互い酔

いつぶれた。翌朝，17（19）年振りに再会したH駅の新幹線口で別れることとなった。会えたことの喜びと裏腹に，17（19）年前にバス乗り場で別れた瞬間が甦り，父親が非常に遠い存在で，今別れた瞬間に，もう二度と会えないのではないかという両価的感情が出現した。不安に駆られ涙が込み上げてきた。「また会えるよね」とRが言うと「大学が夏休みになったら帰ってくるよ」と父は言った。具体的な約束を交わして別れ，感情を押し殺した。以降電話では，生活環境の違いや遠方のため，父に言いたいことが上手く伝えられず苛立ちが募った。結局，父は夏の約束を果たさず，見捨てられ感情が再燃して「会いたいけど，会いたくない」という葛藤が出現した。

2年前にR自身が結婚することになり「どうしても婚約者に会ってほしい」と何度も電話でお願いして帰国してもらうことに成功した。顔合わせを兼ねてRとその婚約者Lと母と父とで九州の温泉に1泊した。母は「今更別れた夫に会いたくない」と言ったが，R自身にとっての両親というのは二人であることを強調して，来て貰うことが出来た。父と母が対面したとき，お互い最初はぎこちなかったが徐々に慣れ，学生時代の話や離婚後のお互いの人生を語り合っていた。Rに義父は存在するが，「本当の両親はこの二人だ」と感じた瞬間だった。20年ぶりの，幸せなひとときでもあった。

その後，父と母も時折連絡を取ることとなったが，Rのことで父に相談した事を何故か母が知っていたり，母に相談したことを父が知っていたりとRの知らない所での父母のやりとりがあり，不自然な関係[1]と感じ，両親への苛立ちや怒りが出現した。また，父に母をアメリカに連れて行かれるのではないかというエディプス[1]不安も出現した。

再会後，仕事でもプライベートでも父親の存在を強く意識するようになった。職場の上司を父親と重ね比較して，Rは価値観が違う人間を毛嫌いした。無意識に，父親への葛藤がある半面，理想とする父親の姿もあった。

Ⅳ．Dr. Jとの出会い

Rは，B専門学校卒業後5年間B病院で勤務していた。平成X年（α−2）月に大学から急遽，教官としての辞令が降りた。2年間での論文作成がその仕事の内容であった。論文など縁もゆかりも無かったところへ，論文指導の教官が一人付いたのだった。

その教官というのが精神分析医，Dr. Jであった。第一印象は，知的な感じはしたが，外見はどこにでも居るおじさんという風であった。スーツに着飾って洒落た腕時計でもしている上品な人を予想していた。Rの父親の転移像である。しかし実際には，対面の日である論文作成コースの初日を迎え，研究室の扉を開けた瞬間，Tシャツに半パン姿の大きな男が大きな机を前にドカッと椅子に座っていた。想定していた人物（内的父親像）とは全く違っていた。散乱した机の上を片付けながらDr. Jは論文作成の方法や自分の経歴を語りだした。口調は偉そうな感じではあったが話すことはよく解った。初対面だが接する内に無意識に父親と比較していた。父親との共通点が幾つかあった。ひとつは，大学教官であること。もうひとつは，話をするときに葉巻を口にすること。体に染み付いた臭いが同じだったことである。不思議なことに，これら三つの共通点だけで父親と接している感じがした。R自身のことを話すと父親に話を聴いて貰っている気がして，自分の父親はこの先生ではないかといった幻想に引き込まれそうになった。そして，Dr. Jの処女論文を渡され感想を書く宿題を言い渡された後，懇親会を兼ねて焼肉屋へ行った。行くまでの間も父と食事に行く勢いで楽しみであった。酒を交わしながら家族や兄弟の話をして楽しいひと時を過ごした。しかし，Rの心の中には，父とF市で初めて対面したときの思い出や喜びが脳裏にありありと浮かび黙っていた。父はRと共に焼肉屋に居たのである。現在と過去の楽しみと思い出が交錯し，複雑な心境であった。父に会いたい，現実の父をDr. Jにしてしまおうかと思った。父親転移は動きだした。内的に，Rは父との時間をいきいきと生きだしたのだ。

Dr. Jと出会って2ヵ月後のα月中旬に，研究室へ，Rは相談に行った。Dr. Jは教育分析の形で時間を決めて相談を受ける提案をして，精神分析の功罪を説明した。Rは「それでいいです」と答えた。

Ⅴ．個別面接での近き父，Dr. Jとの関わり

Dr. Jとの面接は，結果として，9回，4ヶ月という短期で終わった。隔週木曜日の午前11時から50分間の固定枠で，場所は，論文指導の2階の部屋とは異なるDr. Jの3階の研究室で行うことをRは希望した。Rは自分の都合と思ったが，実際には，決断の逡巡からか，度々，3週間間隔になった。慣れない決断

に時間を要したことは，思えば当然である。

面接第1回目は，平成X年α月22日木曜日11時05分から11時55分であった。Rは11時丁度くらいに研究室のドアをノックする。しかし返答がない。窓越しに見ているとDr. Jの姿が見えた。5分ほど遅れてRの前に現れた。時間に遅れたにもかかわらず堂々とした態度だ。鍵を開けRを中に誘導し椅子に座らせた。いつもと変わらず机の上は散乱していた。〈ちょっと待ってよ。片付けるから〉と言いつつ机を片付けだした。「来ると解っていたのだから片付けておいてくれよ。時間に遅れていながら何とマイペースな人だ」といった腹立たしさと軽い怒りの感情を抱きながらも，Dr. Jの整理が終了した。

Dr. Jは真新しいノートを一冊取り出し日付を記入して〈はい，どうぞ〉とRに声を掛け沈黙した。Rは何を話したら良いか迷った。暫くして「大学のレポートと論文を作成すること，そして現場での仕事の三者鼎立が大変で難しいです。三つの領域の仕事で妻と関わる時間も無いし，全く余裕がない」と素直に答えた。〈そうか〉とだけDr. Jは応答した。「結婚して2年間子供が出来なかったので嬉しいですけど，父親と同じ人生を送りそうで怖いです」と言うと，Dr. JがRの眼を観て〈父親と同じ人生とはどういうこと〉と聞き返すため「大学の先生になってレポートに論文や病院の仕事の鼎立で限界を越えて，Lと生まれてくる子供と別れる嵌めになるのではないかという人生です」とRは答えた。〈それは，どのような時に感じたのか〉とDr. Jが更に追求して訊く。「最近，悪夢を見るんです。大学の勉強や仕事が忙しくて最後は家庭を省みず，Rが父に捨てられたように高速バス乗り場で，R自身がLと子供と別れる夢を」とRが答えると，Dr. Jは動じる様子も無く〈高速バスに乗ってどこに行ってどうなった〉と更に訊く。「最後は，N県の山中で首を吊り自殺しました。木にぶら下がり舌を出して死んでいる自分の姿がありました」とRが答える。〈なるほど。……家族と別れて，父さんと同じ方向にバスで向かって，父さんはT市で大学院へ行ったが，RはN県で自殺すると言う訳か。Rは家族が居なければ人生そのものがなくなったのと同じと言う訳だな。男の子が生まれるということで自分の過去に当てはまってしまう訳だ。それを避けたいばかりにRは女の子が欲しい訳だ〉とDr. Jは真剣な眼差しでRの眼を見ながらはっきり解釈した。分析後，どうしても女の子が欲しかった理由とこのような夢を見た理由が初めてRの中で明確になった。夢は，忘れ去るものと思っていたが，この夢は，個別面接を行う4日程前（転移夢）に見て，目が覚めるほど強烈でリアルだったことにも合点が行った。この回は，決別の危機が来ないように時間の使い方をまず自覚する，学習の行き詰まり予防に週間予定を立てる，忙しい中での妻Lとの関係の作り方を具体的にアドバイスして貰い終了した。

面接第2回目は，定刻の平成X年α月29日の11時から11時50分であった。ドアをノックすると〈どうぞ〉と太い声がした。「今日は居るな」と思いつつ扉を開けるとDr. Jは葉巻を口にしながら本を読んでいた。Rが椅子に腰掛けたと同時にノートを開き，時刻を確認した。Dr. Jは，Rの眼を見て〈どうぞ〉とだけ言った。この日は，話したいことが決まっていた。それは，3日前に産科にLの定期検診に行ったときのことだ。絶望が待ち受けていたのである。産科医から出た言葉は「口唇裂です」だった。そして「現在は，形成外科の発達で手術をすれば治ります」とはっきり言われた。RとLは涙を目に浮かべて話を聴いた。更に，産科医は，「しかし，口唇裂で家族歴がない場合30%程度に他の染色体異常も認められ，先天性心疾患なら，1歳までに死亡する確率は90%です。人工妊娠中絶が可能なのは妊娠満20週までで，あと1週間です。よく話し合われて1週間後結果を聞かせてください」と更に厳しい現実を淡々と告げた。Rが仕事から帰ると，Lは毎日泣き崩れ抑うつ的となった。Rも悲しみに堪えながらLを「大丈夫だ。治るのだから」と励ますだけの毎日だった。疲労もピークに達していた。結婚して以来，Lの涙を見たのは初めてだった。Dr. JはRを正視して〈よく状況は解った……〉と静かにゆっくり言った。その声はRの身に沁み込む様だった。暫く，2人は沈黙して居た。そして，Dr. Jは〈……現在の状況と将来的な展望をよく考えて決断すればよい。RとLが今お腹の中で生きている子供に会いたいか，会いたくないかが一番大事だ〉と太い声で言い残して面接は終了した。

面接終了後，Dr. Jが口にした《お腹の子供に会いたいか，会いたくないかだ》の一言とそのときの情景が，何度も頭の中に浮かんだ。自宅に戻り，RはLに「まだ顔も形も解らないけど，俺は子供に会いたい」とRが呟くとLは「分かった」と軽く頷いた。そして翌週の（α＋1）月4日の月曜日，決断の検診日がやって来た。お腹のエコー画像がRの眼に飛び

込んできた。そこには，しっかりと人間の形をした子供の全体像が映し出され，お腹の中で両手を伸ばし，背伸びをし，あくびをしている光景があった。「しっかりと生きている。動いている，凄い」と感動した。「この子の父親[1]になるのだ」と実感した瞬間であった。同時に，中絶を考えたという罪の意識[1]がそこにはあった。

第3回面接は3週間後（$\alpha+1$）月20日の11時から11時50分であった。Dr. Jが〈どうぞ〉と言ったと同時に，Rは「先生，産むことに決めた。子供に会いたいです」とはっきり言った。Dr. Jは〈君が会いたいということは子供も君に会いたいと言うことだ〉と不思議なことを言った。更に〈子供の障害は両方の両親に言ったのか〉と聞いてきたためRは「LとRの母には言いました。ショックは受けていたけれど，産むと決めると励ましてくれました。Lの父もRの父にも，孫が出来るのを楽しみにしていてショックが大きいと思ったので言っていません」と言うとDr. Jは〈言わないと決めたのなら一生隠し通すのか〉と真剣な口調で言った。この助言は直面化だった。心境に変化が生じ，Rの父には報告することに決めたが，Lの父にはLと相談した上で決断するとLに下駄を預ける形で，面接は終了した。産むと決めるか否か，の逡巡が今回の面接の間隔を3週間に広げたのだろうか。

面接終了から2日後，Rは父に電話した。コールは繋がらず，翌日折り返し電話があった。「R？　元気かい？　母さんも奥さんも元気？　昨日電話もらったようだけど」と明るい声で父が言うため，Rは緊張感を伴いながらも「みんな元気だよ」と心とは裏腹に明るい声で返し，子供の障害を報告した。「実は，昨日電話したのは産まれてくる子供のことだけど，医者から口唇裂と告げられた。手術すれば治ると言われたけど父さんにも報告しておこうと思って……」とRは素直に言った。父の性格上，反対されるのを予測していた。すると父は「大丈夫だよ。今は医学の発展で治るよ。K大学の口腔外科に知り合いの先生が居るから手術の内容や後遺症について聞いておくよ」と励ましてくれて協力的であった。Rは安堵した。しかし，1時間後，Rに母から電話があった。父はRの電話後，母に電話をして来たのだ。内容を聞くと「産まれる前から奇形が分っていたら，他にも障害の可能性があるのに，何故Rは羊水検査をしなかったのか。米国では，先天異常が分かった時点で流産させてしまうのが通常である」との批判であった。Rはこれを聞いた途端，父への殺意が芽生えた。父に解って貰えて良かったという喜びが，一転して怒り，殺意へと正反対の感情へと変化した瞬間であった。Rは興奮しながらも母に「羊水検査のことを今更言ってどうするのか，R自身にせっかく授かった子供を殺すことなど出来ない。例えどんな形になったとしても親としての役割を果たして見せる」と意思表示した。そして，最後にDr. Jの名言から『どうしても子供に会いたい』という言葉をRは言い残した。父の言動は殺人者であると批判した。「父からの電話にはRの気持ちを伝えるように」と母に伝えた。母は「貴方たちが決めたことだから，もう何も言わない。父さんから電話があればRの気持ちを伝えておく。責任を持って育てなさい」と弱々しい声で言い残した。電話後，父の言葉を伝えただけの母を，まるで母自身の言葉のように感じ，怒りをぶつけてしまった事に罪悪感[1]を抱いた。この父と母との電話でのやり取りの中で，父への怒りや殺意[1]，母を苦しめてしまったという罪悪感[1]を抱いたエディプス状況[1]のまま，次の面接日が来た。

第4回面接はまた3週間後（$\alpha+2$）月10日11時10分から正午までであった。また，Dr. Jの都合で面接開始時刻が遅れた。RがDr. Jの研究室の前で待っているとDr. Jは白衣姿で現れた。時間に遅れたのに謝罪もせず焦る様子も無く，Rが席に着くと，面接終了時刻12:00を告げられ面接が開始になった。エディプス的緊張の為か，Dr. Jの遅刻の為か，面接開始と同時にRはDr. Jに父への怒りをぶつけた。「父に子供の障害について素直に言ったら，父は僕には大丈夫と言っておきながら，母には正反対のことを言った。何故，父は母を通じて本音を言うのか解らない」と激しく怒った[1]。Dr. Jは〈父さんと，その後連絡は？〉といつもの調子で聞くため「連絡しても繋がりません」と答えた。〈繋がらなければ手紙を書いたらいい〉とDr. Jがあっさりと言うため，「手紙を書くにも住所が解らないし，現在の父親の家族はRと接触していることを知らないので書くことなんて出来ない」とRは，「母の中に居る父」[2]への憤怒は収まらないようで，Dr. Jの意見を否定した。すると，Dr. Jは，〈相手に思いを伝える方法として一番良いのは，眼を見て話すことだ。相手に口調や表情や態度がそのまま分かって気持ちが伝わる。次が手紙，何度も読み返して考えられる。電話は，相手の顔が見えない。お互いの気持ちが伝わりにくい〉と言った。しかし，話があるからアメリカから帰国しろとも言えないし手紙を書

くことも出来ない。面接の中で考えた末，父に直接，電話で思いを伝える決断をした。Dr. Jも反対しなかった。更に〈Lの父さんには障害をこのまま隠し通すのか〉とDr. Jが言うため「Lの父にはお盆に帰るのでそのとき話します」とRは答えた。Dr. Jは〈子供の父親はRでRのお父さんじゃない。何か文句を言うようであれば『親は誰か』と訊いてやればよい〉と言うため，Rは「そうか，なるほど。子供の父親は自分だ」と納得した。また〈Lの父さんの趣味は何？〉とDr. Jが訊くため「釣り，家の前の川で鮎を捕るのが趣味です」とRが答えた。するとDr. Jが〈釣りに一緒に行き，話す機会を伺ったらどうか〉と言った。Rは，じっとしていることが大嫌いだったが，否定せず参考までに意見を聞いておいた。RとLの父との接し方を中心に面接は終了した。この回のRの激怒は父親陰性転移でもあり「母の中に占める父の居場所」[2]への怒りでもあろう。以後Rは無意識に頑固に「居場所」を問題にする。

面接後，帰宅してLと話し合い，LはLの母に電話をして「帰省したときに，父にきちんと話そうと思う」とRとLの意思を伝えた。するとLの母から父に話すとのことだった。帰省したときに父が現実を知って悲嘆するのを予防すべく父に言っておこうと考えたのだろう。2日後，Lの父からLに電話がきた。「身体の調子は大丈夫か」と心配して電話をしてきたという。電話では悲嘆した様子は無かったようだが，Lの父からの電話は本当に珍しかった。Lは父の心配を感じた。その後，帰省したときに再度Lの父と向き合い，話をした。「原因は解らないけれど，口が切れている病気で生後すぐは見栄えが悪いかも知れないです。ショックを受けられるかも知れませんが……」とRが相手を思い遣りながら言うと，Lの父は「大丈夫」と笑顔で，悲しむ様子もなく「孫にベビーカーを買ってやらないかん」と急に言い出し，隣町のベビー用品の品揃えの良いデパートまで家族みんなで買い物に行った。そこで，ベビー用品，出産用品など，いろいろ買い揃える行動でLの父はショックを和らげようとした。そしてO県に帰る日，Lの母が茶封筒をRに手渡した。中を見ると10万円だった。親のあるべき姿を見た気がした。このような，さり気ない気配りが本当に嬉しかった。O県に無事に戻り2日後，Dr. Jとの面接の日がやってきた。

第5回個別面接（$\alpha+2$）月24日11:00～11:50で行われた。Rは「一昨日まで帰省してきました。Lの父親にも子供の障害のことは納得してもらえました」と「父にも電話しました。『父親は俺だから責任は俺が持つ』と言ってやりました。父は何も言えませんでした」と言った。Dr. Jは〈よく言った。大体，子供のことはこれで解決かな〉と笑いながら言った。

4回の面接終了時からRは父に何回も電話を掛け続け，ようやくつながり，Rの言いたいことが言えた。この言葉を口に出来たのは第4回の面接でRがDr. Jに《子供の父親は誰だ》と言われた影響かもしれない。ともかく気分的に楽になった。

5回面接が終了してからRとLの人生を変えるような出来事が再びあった。（$\alpha+1$）月の終わりごろ，Lが一枚の新聞チラシをRに見せてきた。新築一戸建て物件のチラシだった。Rはそれを見て，生まれてくる子供と庭で一緒に遊んでいる姿や家の裏の公園で遊んでいる姿を空想した。Rは生育歴でも述べたとおり，幼い時から家族関係が次々変わり，引越しの回数が非常に多く，落ち着く場所を知らない人間になっていたからである。小学校で3回転校した。中学も国立に入学できたが，下からまっすぐに上がってくる連中が8割で既に仲間が出来上がっており，その中に分け入っていかねばならなかった。他方，家では，登校拒否さえ起こせないくらいに母は厳しかった。塾でも勉強できず先生に叱られ，更に母に告げられ，又々，叱られる日々だった。高校は右も左も分らない他県へ急に親から離され，一人暮らしで，不安と孤独感に苛まれた。「一体，人生って何だろう」と日々考えた。厳しさばかりで，人から認めてもらうことは無かった。

この様な状況を経て幸せを手にした。結婚して子供が出来たのだ。家を目の前にしたとき，子供にだけはRと同じ人生を送らせたくないと思った。生まれたときから住み慣れた家があり，親友がいて，両親揃った本当の家族がいる。R自身が得ることが出来ず辛い思いをしたことを子供にさせてはいけないと身に沁みて感じた。家族が幸せに暮らせるようにと思い，この家が欲しいと思った。一方，Lは現実的であった。近くに病院が無い，職場までの所要時間，治安，近隣住民の層などを気にした。ローンの最悪の利息も想定して，十分話し合い，購入可能であろうという事になった。

第6回個別面接，3週間後（$\alpha+3$）月14日11:00～11:50 a.m. 笑顔で「先生，家を買おうと思います」といきなり言うと，Dr. Jは〈どこに，いくらで，きっかけは〉と聞いてきた。「I市に○○○万で。子供が出来るし，落ち着く環境で広い家が欲しくて」とR

が答えると〈子供が小さいときに家を買うと壁紙を剝がしたりして家が滅茶苦茶になる。3歳を超えてからにした方が良いのでは〉と返され，断固反対意見に聞こえた。しかしRは，子供が壁紙を破く姿や，壁にペンで落書きしている姿が頭に浮かんだものの気持ちは揺らがなかった。3人で豊かに生活している情景ばかり浮かんだ。Lも納得して購入の最終決断をした。自分で決断したという喜びと，ひとつ大人になったような感じとがあった。

第7回個別面接，3週間後（α＋4）月5日，11:00～11:50 a.m. 面接開始と同時にRは「先生，家を買いました」と声を震わせながら俯き加減に言った。「怒られる」と思った。Dr. Jは〈ローンは何年，金利は？〉といつもの口調で質問してきた。意外だった。Rは「35年で金利は0.8%優遇してもらって1.875%で変動金利です」と答えた。するとDr. Jは〈父さんには言ったのか〉と聞くため「批判されるのが目に見えているため言っていません」とRは返した。Dr. Jは〈批判されるかどうか言ってみないと分らないな〉と父に言えとも言うなとも言わずRに返した。Rは自分で決断して父と闘ってみるか逃げるか考えろ，と言っているのだと感じた。言ってみる価値はあるかも知れない，頭金の少しでも出してもらえる可能性もある，Rに対して父親の役割をあの人は何も果たしていない。しかし，真っ直ぐに「家を買ったから頭金を出せ」と言うのも難しいし「自分で決めたことは自分で何とかしろ」と批判は明らかだ。方法はないかを課題に面接が終了した。

第7回の面接終了後，早速父に連絡を取り，家の購入について話した。Rが家を購入したことを言うと，父はDr. Jと同じような質問をしてきたのでDr. Jと同じ様に答えた。父転移は通奏低音のように響き続ける。すると父は「払えるの？　金利はこれから高くなるよ」と言ってきた。そのときRは『解っている。説明するのも面倒くさい。うるさい。俺の決めたことにつべこべ言うな』と怒りの感情を心中で抱きながらも，実際は「大変だけれど，これから一所懸命に働かないとね。頭金少ないからもう少しあれば助かるけど。Lの両親には出産に向けていろいろ揃えてもらったし頭金も少しではあるけれど出して貰った」と誘導したが，父は「頑張って働きなさいよ」と頭金については全く触れようとしなかった。

そして20分後，子供の奇形のことを伝えた時と同様に母から着信があった。予測していた。母経由[1]の文句を。母からの電話は「父さんから電話があって金利の心配をしていた」と「父の現在の奥さんが癌で，父の財産の放棄をして欲しいらしい」であった。Rは母に「それで，どうしろと言っているの？　家を買うなとでも言っているの。そんな権利はあの人にはない。金利のことなど心配される必要など全く無い。心配されてもローンは減らない。同情するなら金をくれ，と言ってやりたい。財産は，法的に受け取る権利がある。何故，向こうの家族のことを考えて財産放棄をしないといけないのか。馬鹿馬鹿しい」と感情を込めて母に訴えた。母は何も返せなかった。とりあえずもう1回父と話すと母に言い電話を切った。母を通じて[2]の父の自分勝手な言い分に復讐を考えた。

そして，考えた末に電話をした。Rの電話に，折り返しすぐに掛かってきた。直接対決の瞬間が来た。Rから「何か言いたいことあるの？」と聞くと，金利と遺産放棄を話してきた。Rは「今まで生きてきて，父親の役割も解らず，そして自分がいざ父親になろうとしてもどうして良いか解らなかった。父さんは肝心な時居なかった。いざ現れたら，妊娠継続を批判し，自宅購入も批判して，苛立つばかりだ。同情するなら金を下さい。それを，僕の子供の手術費や家の頭金にします。今更，表面的に愛情表現や同情されても僕には伝わりません。心から父としては受け入れられない。父さんに怒りを向けるばかりで何も変わらない。もう，父さんから受け取れるのは，愛情ではなく物しかないような気がします。少しでも親としての自覚があるなら僕や僕の子供が幸せに暮らせるように配慮してください。遺産放棄についても一切，印鑑は押しません。父さんの子供として産まれてきた，せめてもの権利であるから」と言うと父は「解った……」と弱々しく電話を切った。気持ちが楽になった。斬ってやったと思った。喜びがあった。素直に言いたいことが言えた。Rが父に反抗した瞬間であった。初めてであった。翌日「Rに厳しいことを言われた。大学で講義のとき，先生，どうしたのかと心配するほど顔色が悪かった，と学生に言われた」と父は母に電話してきたという。Rの気持ちがやっと解り，父は思いつめたのであろう。これ以上言うと父もRと似て両極端な人間であるため自殺でもされては困ると思い，様子を見ることにした。話さないと思いが伝わらない。話すと殺したくなる，だから話せなかったこともうっすら分かってきた。殺したいけど，死んでは困る父の存在をも実感した。

第8回面接，3週間後（α＋4）月27日11:00～

11:50 a.m. で行われた。Dr. Jに「先生，父に逆襲してやりました」と言うと〈そうか〉と微笑んだ。更にRは「逆襲はしたけど，父は，アメリカに住む父しか居ないんです」と言った。Dr. Jは〈その通りだ〉ときっぱり言った。それで，もうDr. Jとの面接が無くても大丈夫だとR自身は内心感じた。しかし，言うには躊躇した。Rの気持ちが表情にでたのか，Dr. Jはおさらいの如く，目次を作るように#1. 大学，#2. 論文，#3. 家の購入，#4. 父との関係　について大丈夫か確認してきた。「大学のレポートは終わりましたが，論文が全くです」と素直に答えるとDr. Jは〈Rは，計画を立てながらよく頑張っている。自宅購入で時間を取られ，子供のことでも時間を取られ，仕事しながら大学の勉強もして，計画的に出来ている方である〉と褒めてくれた。嬉しかった。同時に時間の使い方が本当に楽になり，計画性が出てきたと実感していた。初めは「やらされている」と被害的だったのが，いつの間にか「やらないといけないんだ」と主体的になっていた。そして，忙しい中でも，色々に挑戦して自分自身を鍛えていくことが現在のRには必要であると感じていた。当たって砕けろ。砕けたときに劣等感を抱いたり，人に頼ったり，怒りを露わにするのではなく，最良，いや，次善の選択をしていくことこそが必要であると自己分析していた。父は父，Dr. JはDr. J，RはRなのである。このような心境の変化を得ることが出来たのも架空だが代理の父親であるDr. Jのお陰である。

第9回（最終個別面接日）翌週（$\alpha+5$）月2日（友引）とだけあり，時刻の記述はない。Dr. Jを攻撃する気持ちは面接終了を思い，失せたのであろう。面接開始と同時にRは「大体，解決できたので，今日で面接を終了したい」と告げた。Dr. Jは，最初は本当に病気になるかも，と父親の如く心配していたことを漏らした。すぐ，いつものDr. Jの口調に戻り〈自ら終了といえるようになったな。短期間である程度の解決に向かって良かった。しかし，君の本当の解決，治療の終了は子供が産まれて，5歳くらいになったときだろう〉と言った。これで，すべてが終了とは言わなかった。Rもそれで助かった。完全に終了を告げられた瞬間に，見捨てられ不安が現れそうだったからである。最後に土産を強請るように，Rから「先生は何故，精神分析医になったのですか」と聞くと，Dr. Jは〈治療が終わるときに未だ聞きたいようだったら……〉と答えた。Rは次の言葉を思い付かなかった。Dr. Jを占領したかった。〈では，終了[3]だな〉と告げられ，「はい」と明るく返事をした。ブリトン，R[3]は「抑うつポジション[2]やエディプス状況[1, 2]には決して終わりが無い」と述べている。堅い握手をして研究室を後にした。Rの数倍大きい手であった。最後にDr. Jを見たときは，父でも，父の役割をしたDr. Jでもなく，教官としてのDr. Jであった。しかし，この近き父であるDr. Jが，Rの人生で掛替えの無い人物になることは間違いない。

Ⅵ. 考察――何人もの父親，分析と自覚（統合），治療要因としての父親体験

1.「親愛なる父」警察官との関係の考察

「親愛なる父」とは，交通事故を契機に出会った警察官のことである。7歳のときに起こった事故は，路頭に迷い果てた結果の事故であった。間接的な自殺だったのかもしれない。事故直前は「死んでしまった方が良い。居なくなったほうが良いのだ」とRは抑うつ的だった。3歳の物心がつき始める頃に父母の離婚で実父と別れる結果となり，5歳時，義父を含めて4人での生活が始まった。義父，母，義父の連れ子，母との間の異父弟を中心とした生活が進み，Rは疎外感を覚え，居場所を見失ってしまった。

交通事故はこんな状況で起こった。事故直後に駆けつけ病院にまで付き添ってくれた，警察官の姿は父の理想像となり，生きる気力に繋がったとRは信じている。強く，逞しく，優しい声を掛けてくれた，この人物こそが父親の姿に違いないと幻想の世界で思って生きて来た。「親愛なる父」に助けられて病院に，仕事中でも母が来て泣いたことで，この警官が母を病院に呼び[1]，母親をRに振り向かせてくれて嬉しかった。更に「親愛なる父」の存在感[1]が強くなった。成人の現在も「間違いを正す警察官になりたい」という憧れは消え去らない。Rを救ってくれた「親愛なる父」の姿，警察官を意識して生きてきたからこそR自身は表面的には，全うな生き方が出来たのではないかと考える。『居場所』が欲しかったR自身を父母には気付いて欲しかった。義兄は，現に非行に走り手が付けられない状態にまでなり，未だに定職に就いていない。夢に現れたように，Rは人生に疲れ果て，自殺に追いやられていたかも知れない。愛情を持って育て，子供の感情をいち早く汲み取るのは，母親の大きな役割である。現実に眼を当て子供の社会性を大きく左右するのは，父親の役割である。父親を超えられないけど超

えようというコンプレックス[1]を抱きながら，怠惰な自分と戦い，両親の背を見て，子供は日々成長していると思うのである。

2.「実父」との関係の考察

Rは「実父」に3歳で見捨てられた。全て記憶の断片に残っている。現に「実父」とバス停で別れた悲しい記憶は遺り，瞼に「親愛なる父」のことを思い描きながら「実父」を求めて徘徊して生きてきたのである。そして，遂に17（19）年振りに念願の再会を果たし，感動を覚えた。その喜び，感激とは裏腹に「実父」を超えられない悔しさや，電話や対面での実父とのすれ違いや，母には直接に漏らす[2]がRには本音を言えない父[2]に怒りが生まれた。「実父」と母親との関係に嫉妬[1, 2]していたことや，R自身が「実父」を眼の前[1]にして，このような本心を語ることが出来ない悔しさ，感情を直接ぶつけることが出来ない苛立ち[1, 2]から，怒りを抱いてきた。更に「実父」からRに対してやることなすこと全てを否定され，抑圧され続けた結果，怒り，葛藤は頂点に達して，親殺しの感情となった。「実父」を殺したくても殺せない憤怒に，17年間，Rは塗れて生きてきた。

メラニー・クライン[2]は「エディプス葛藤の早期段階は，発達の全性器期を非常に大きく支配する」と述べている。子供の立場[2]から言えば，父母が離別し，父親，母親の役割が何かを知ることなく，成人期に成っても，尚，父母に対する怒りや親殺しの感情を抱くことは，正常にエディプス・コンプレックス[1, 2]を通過，克服できていない証拠である。一見正常でも，心の奥底に秘められた深く暗い闇がある自覚が大切である。昨今の虐めなどのニュースを見ると，現代社会に，Rのような子供が多いのかも知れないと思う。

3.「人生の改革を起こさせた父」 Dr. Jとの関係の考察

RにとってのDr. Jは，父親という役割の全体像を映し出す人物であった。実父との共通点から転移（愛着と攻撃）感情に見舞われたRを励まし，父親的役割を担いつつ，治療者であり，論文指導教授でもある，といった困難な役割を引き受けて[4]貫った。どの役割にも偏らず，Rに付かず離れず，中立性を一貫して持ち続け，実父とのあるべき親子関係を身[5]をもって体験的に教えてくれた，かけがいのない「第三の父」であった。人生には選択肢があることを示し，決断することで自由に生きる道を開く体験をさせてくれた。実父やRが追い求めてきた父親像にはないものを備えていたと思われる。つまりDr. Jは，「息子」の選んだことを「サポート，後押ししつつ，喜びを分け合うという理想の父親像」をRに提示[4]してくれた人物であった。そしてそれは，Rの運命が変わる契機となったのである。Rが人間関係や時間の使い方に困り果てたとき，《時間表を書け，人間に与えられた時間は皆同じだ》と檄を飛ばし，子供の障害で堕胎をも考えて，苦悶したとき《生まれてくる子に会いたいか》と言うDr. Jの一言がRの人生全体を変えていった。実父とのやり取りの中での躓きや，やり場のない怒りを受け止めつつも，Rがエディプス・コンプレックス[1, 2]を超えるには父と直接言葉で対決する方法しか無いことを態度[5]で教えてくれた人物である。

4.「義父」との関係の考察

「義父」をRはよく忘れる。存在していないかの如くである。今回の騒動を一切知らせていない。母が離婚して2年間，Rは母を独占できた。しかし義父はRの母を奪った[1]。居場所を奪い，Rを地獄の果てに突き落とした人物というエディプス[1]的被害意識が，未だに無意識層に，憎しみや深い恨みとして存在しているから，よく忘れるに違いない。

5.「妻Lの父」との関係からの考察

「Lの父」は，いい父という印象ではあるが，肝心なことが言えず遠ざけてしまう存在で，子供の障害や自宅購入について真正面からぶつかり合って話すことが出来なかった。問題解決はLやLの母を通じてなされ，父の理想像を描きながらも柔らかく無意識に遠ざけているという，やはり，相反する思いがあったと本論作成中に気が付いた。

6. 面接終了後，Rの心境の変化と全体的考察

Dr. Jとの個別面接が終了し，Rの気持ちは自由に楽になった。面接開始前の，悪夢とは一転して，時間の有効活用，父たちとの関係の持ち方，更に人生の壁に差し掛かったとき，真正面からその壁にぶつかっていくことで人生は乗り切れることをDr. Jが教えてくれた[4]ように思う。父と直接対決[1]をしたとき心からそれを感じた。父に初めて反抗した[1]瞬間のあの開放感をRは忘れられない。罪悪感[1]など一切ない。優越感にさえなったということは，憎かった父への逆襲に成功した証である。人間として生きている感触を手に入れることが出来た。この26年間，父母から抑えつ

けられ，人生の選択肢がなかった。それは，居場所を失う怯え，見捨てられ不安からだったように思う。Dr. JはRのやることを否定したり抑えつけたりはしなかった。一つのことを考えるのに選択肢を与えてくれた。父のあるべき姿[4]であると感じた。子供を納得させる接し方，姿を教えてくれたのだ。元気を得たRは家族の『居場所』を作るべく，同じ人生の過ちを子供にさせないようにRの人生を賭けて『自宅』を購入した。面接が終了した今も全く後悔はない。Dr. Jにも反対されての，初めてのRの主体的決断であった。一生掛けてローンに追われるかも知れない。お金の問題ではなく，揺れ続けた『両親との関係の容器』[6]『居場所』を求めた結果の決断だった。

Ⅶ. 何が「治療要因」であったか。

1．Mr. Rの変容過程

本例のテーマは，父への自己主張，直面化，長引いたエディプス・コンプレックス[1, 2]を超えることである。見捨てられ不安に怯えない事でもある。それがどのような過程を経て達成されたかを考察したい。

Mr. Rの変化は，焼肉屋での「父に会いたい，現実の父をDr. Jにしてしまおうかという気持ちであった」という言葉に顕著に現れ始めた。フロイトが父親転移と名づけた現象である。基本的信頼[7]の始まりでもある。ここにRの内なる父親像が変化する準備が整った。

果たして，Dr. Jとの面接は，劇的なRの自殺の夢で始まった。父に捨てられ，且，23年後，父と同じく，論文を書く立場に立ったことで，Rは行き場をなくした。父との両価的な同一化から，父への攻撃が自分に向き，殺したい父[1, 2]という怒りが，必死の置換防衛で死なねばならない自分という罪悪感となり，居場所を失うほどにRは追い詰められた。2回目の面接で，更に絶望的な口唇裂の報告をすると，Dr. Jから《お腹の子供に会いたいか会いたくないか》と直面化され，現実に向き合わざるを得なくなった。そして，妻Lに「子供に会いたい。産んで育てよう」と言った。Lは疲れて泣く日々の中から「分かった」と頷いた。これを3回目の面接で，Rは「動く子供の姿を見たら殺せません。産んで育てます」と決意を述べた。結婚の決断は「飯を作ってもらえる」と自然で主体性の意識はなかった。子供を産む決断は口唇裂と他の奇形の可能性があるだけに迷い，堕胎の時間制限も有り苦しかった。そういう意味での主体的な決断を初めてMr. Rは出来たのである。エコー像で動く小さな生き物の父が自分であることを認識したのは，Dr. Jに《自分の子供に，会いたいか，会いたくないか》と決断の基準をはっきり提示された，直面化が大きかったとRは回想している。

次に，初孫の障害を「Lの父に言うか」「Rの父に言うか」でRは苦悶した。Lの父にはLに相談の上となった。第3回目の面接の2日後，Mr. Rは実父に電話した。批判は予想されたが素直に言った。Dr. Jに〈お父さんに報告したのか〉と尋ねられ直面化された事と，Dr. Jの面接を素直に希望して受入れられた事が，Rを後押ししたのである。1時間後，父から母に電話があり，母による[2]と「他の先天異常の可能性もあり，米国では奇形が分かると堕胎する」との事で，母を通じた父の本音[2]は批判だった。Rは父に殺意[2]を持つ程に憤怒[2]した。そして「どうしても子供に会いたい」と父親としての使命感を述べると，母は「分かった。責任を持って育てなさい」と弱々しい声で言い残した。父に対する如く母に怒ったRは，母を苦しめてしまったかのような罪悪感[1, 2]を持った。エディプス・コンプレックス[1, 2]が見られる場面である。このことは第4回目の面接で話された。Lの父は，釣りが好きで酒を飲めとも言う人，無意識に直面化を外す人で，障害を言う時はLと相談して決めることになった。だがR→L→Lの母→Lの父へという経路[1]で先に話され，Lの父から珍しくLに確認の電話があり，Rは帰省時，Lの父に面と向かって[1]話しLの母から援助金を貰った。第5回目は，RからLの父への思い遣りと実の父に「父親は俺だ。責任は俺が持つ」と自己主張した報告だった。

勢いの付いたRは，第6回目に突然，更なる自己主張，自宅購買を切り出した。Dr. Jは〈子供が3歳位になるまでは家が傷むぞ〉と反対した。Lは現実的であったがRは毎月の返済金を計算して経済的に可能と説得して買う了承を得た。第7回でRは「家を買いました」と声を振るわせ俯き加減で言った。Dr. Jは〈金利は？〉といつもの口調で批判せず[4, 5]質問した。Rは意外だと思った。Dr. Jの言葉より態度[5]をRは観ていたのだ。この対応をDr. Jの是認と受け取り，Rは父に自宅購入を報告し「頭金がもう少しあると助かる」と暗に援助を求めたが「頑張って働きなさい」と肩透かしを食わされた。続いて母から父の電話伝言[2]「財産相続放棄」があった。折り返し電話[1]でRは「父親の役割も分からず，自分が父親になろうとしてもどうしてよいのか分からず，子供が出来

て批判，家購入の批判，イライラする。同情や愛情表現よりも金を下さい。親としての自覚があれば，僕，Lや僕の子供が幸せに暮らせるよう配慮してください。権利放棄の印鑑は一切押しません。お父さんの子供として生まれてきた，せめてもの権利です」と不安，苛立ち，怒りの重い言葉を吐くと，父は「解った……」とだけ言い電話が切れた。Rは気持ちが楽になった。逆襲してやった喜びがあった。素直に言いたことが言えた[1, 2]。8回目は，父への逆襲の報告でDr. Jは〈そうか〉と微笑みRの攻撃を是認した。峠を越えたと思われ全体の問題点を整理した。#1. 論文作成と大学のレポート。#2. 赤ちゃん誕生準備は万全。#3. 自宅購入の決定。#4. 父に言いたい事を言って「解った」と言わせた。9回目，上司と夜勤で11時間話し合って和解できた話もあり「面接無しでもやって行ける」「今は平穏だ」というので，内的父親像は好転したとDr. Jは判断して，面接を一旦中止にした。

2．Dr. Jに受容されることでMr. Rの直面化の能力は育った。

Mr. Rは，Dr. Jの面接を希望し，これが受け入れられたこと[4, 5]，と自宅の購入を事後承諾の形[1]ではあるがDr. Jに受け入れられたことで自信を持ち「実の父」に「父親の役割も分からず……(既述)……権利であるから」と言い放つことが出来た。父も「解った……」とだけ言い電話が切れた。これで，父子関係の形[1, 2]は変わったと思われる。「妻Lの父」は，「実父」と「Dr. J」の中間に位置しており，Rはゆっくり「息子」の障害を伝えた。妻Lとその母の準備[1]があって，Rは「Lの父」に面と向かって[1]，しかも，ショックを与えないように配慮しながら報告するという柔かな直面化，健康なコミュニケーションを持てるようになった。この相手への配慮は，「上司」との和解をも生み出したと思われる。

3．Mr. RとDr. Jのそれぞれの直面化：

問題解決：自宅購入の決断という，エディプス[1, 2]の場を安定させるMr. Rの解決法

逆 転 移：見捨てた父への攻撃的転移に対応したDr. Jの揺るぎない中立性[5]

Dr. Jは，Mr. Rの父親への見捨てられた気持ちを観て取った。Dr. Jが少しでも面接に遅れた時など，Rは攻撃的な態度（父親転移）に出たが，Rの憤怒を充分理解しつつ，Dr. Jは一貫した態度[5]と通常の声調で受け止めた。Dr. JはRの考えを尊重し，Jの考えは言うが，決して強制はせず，一貫して中立的に接した。また，家の購入の事後承諾というRの行動も，一旦，押し付け，過剰な自己主張と思い批判的にはなった[5]が，後で考えると，安定した家族の三角[1, 2]を育てる場を希求するのは当然と思えるようになり，逆転移[5]は主観的から客観的[5]になり，中立性は保たれた。なぜなら3歳で父に見捨てられ，5歳時の再婚で「義父」と義兄が現れて母は奪われ，7歳時，異父弟が生まれ，Rのエディプス三角[1, 2]は断片化され，「実父」との対話対決[1]の無いまま，空虚で苦痛に満ちた20数年が無為に過ぎたままだったことをDr. Jは深く，認識して受容できていたからである。

Ⅷ．文献的考察

最後に，先行研究の嚆矢，フロイトの症例，狼男[8]や鼠男[8]と本例を比較検討する。フロイト症例と本例の相違点は，

第一に，父子関係。前者では「持続」，後者では「父の見捨てによる切断」がある。

第二に，母子関係については，R本人の終結希望を尊重して，Dr. Jは母子関係の分析には踏み込まなかった。しかし分かる範囲で考察を試みよう。まず，母への愛着は，義父の手前，厳しすぎた母[1]にRは陰性感情を抱くが，見捨てず育ててくれた関係維持への感謝に端を発する点で，フロイトの述べた性愛的愛着の母子関係とは異なっている。経過中，「実父に母親をアメリカに連れ去られるのではないか」という不安をRは抱いていること，そして「父親に対する怒りを母親にぶつけた半面で母親を苦しめてしまった」と罪悪感を抱いていることは，いわゆるフロイトのいうエディプス・コンプレックスの特徴である。しかし，本例の最も際立った特徴は，『父親は，母を通じてしか，本音を言わない』と『母の中で，母を占領して居る父』[2]に対して，Rが深い憤怒[2]を抱いていることにある。これがRの葛藤の核心であり，ここにクラインのいう内的対象関係での早期エディプス[2]関係が見てとれる。最終回，RはJを占領したかった。母親転移は起こってきているのである。Mr. RはDr. Jから『内なる母』を守るごとく治療を終えたと思えば治療関係もエディプス[1, 2]関係そのもの，彼特有の内的エディプス関係も転移されているのであると言えよう。

第三に，治療関係については最後に詳しく述べるが，フロイトのそれは，頻度は毎週，年単位であるのに対

し，本例は，僅か4ヶ月殆ど3週間間隔9回で短期に終わった。フロイトの解釈による陰性感情の意識化に比して，本例では，治療者の態度[5]，中立性や逆転移[5]を軸とする関係，受領者の非言語的同一化が重要視されたことが主な相違点である。

鼠男の症状は，「父親が鼠刑という拷問を受ける」強迫観念である。鼠刑は，患者である鼠男が，「想う女の許へ行くか，最良の友である父の許に留まるか」という葛藤の比喩であり，両極の感情を混ぜ合わせた夢のような多重表現，妥協形成の産物である。鼠は子供，従って性器を暗示する。肛門から鼠が入り腸を食い破る空想は，父への激しい攻撃，と同時に，女性との性交をも潜在夢のように暗示している。

他方，狼男では，その原光景を暗示する狼の樹上からの凝視の夢に，「母を性的に満足させる父のようになりたい，理想化，同一化と，それを実行したら去勢される不安」とが読み取れる。それらの意味をフロイトは患者の自由連想で，患者が体験している感情に沿って解釈し，言語でその無意識に動く感情や欲望を明確化，意識化して治療していった。症状は，陰性感情の突き上げを，辛うじて現実適応するために，患者の無意識がありとあらゆる防衛を駆使した変装である。2例は，万能感，感情移動や反動形成などの頑強な防衛を，解釈で解きほぐしつつ，父への陰性感情[1]を意識化することが治療であった。

2例とも父親との関係は継続していた。だから関係[1]の意味を新しい視点で観ること，隠れた意味を意識化できれば，関係は変化して治癒して行ったのである。

しかし，本例は，父親との関係[1, 2]は父の見捨てにより切れていた。切れた関係に言葉で解釈しても無効である。近頃の症例の特徴である。受領者自身が新しい関係を身につけることが治療となる。それで治療者は，言葉よりも，態度[5]と関係維持を重視した。態度[5]が関係[1, 2]を感情を決める[6]。抑圧，否認などの防衛を破る激しい，または，深い陰性感情の変装が症状であることは今も変わりないので，治療者の態度[5]は，受領者の感情に届く治療の源になりうる。治療者は逆転移を認識[5]し，態度[5]，治療関係[2]を治療の道具に使った。面接に遅れた治療者に怒る受療者へ，言葉で怒りの意味を説くより，怒りに動ぜず，変わらぬ暖かい口調で〈親に伝えたか？〉と明確化や直面化で対応した。肯定的態度で関係維持，存在の仕方を一貫する努力をした。ぶれない態度が関係を安定化し，受領者自身の激する陰性感情を治療関係の容器[6]に収めて，激情を治める同一化の対象として治療者は受領者の眼前に，今ここで，存在し続けた。治療関係が彼の失った居場所になった。言葉・解釈から態度・治療関係の自覚へ，これらの変化した技法は，フロイト以来100年弱，対象関係論（1949）[2]，逆転移の活用（1950）[5]，修正感情体験（1956）[5]や治療の容器（1960）[6]としての治療関係[5]という歴史上の精神分析の巨人達が達成した業績[1-8]であり，これらを実行した。成果は，殆んど3週間間隔と，面接間隔の広がりに，決断の逡巡として現れてはいるが，9回4ヶ月の短期で安定を得た形に結実していると，今，思われるのである。

謝　辞

症例検討会指導者と同時に教育分析者でもあるDr. James D. Templeton, F. R. C. P. と本論掲載をご支持頂いた高橋清久先生をはじめ様々な方々に深謝致します。

参考文献

1）フロイド S. リビドーの発達と性的体制　精神分析入門第21講. 東京：日本教文社；1970年. p. 123－53.
2）クライン M. エディプス葛藤の早期段階　メラニー・クライン著作集1. 東京：誠信書房；1983年. p. 225－38.
3）ブリトン R. 信念と想像　精神分析のこころの探求. 東京：金剛出版；2002. p. 48
4）Alexander, F. Psychoanalysis and Psychotherapy. New York : Norton ; 1956. p. 41－2, 143－5.
5）ハイマン P. 逆転移について. In：松木邦裕. 対象関係論の基礎. 東京：新曜社；2003. p. 179－96.
6）ビオン W. ビオン臨床入門. 東京：金剛出版；2003. p. 67－77.
7）エリクソン EH. 幼児期と社会. 東京：みすず書房；1977. p. 317－22, 351.
8）フロイド S. 症例の研究　フロイド選集　第16巻. 東京：日本教文社；1969. p. 1－114, 221－390.